9th FENS FORUM OF NEUROSCIENCE, Milan, Italy, July 5-9, 2014

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40225

『学会見聞記』

9th FENS FROUM OF NEUROSCIENCE に参加して

9th FENS FORUM OF NEUROSCIENCE, Milan, Italy, July 5-9, 2014

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
脳医科学専攻　分子神経科学・統合生理学
博士後期課程２年
征　矢　晋　吾

2014年7月5日から7月9日にかけてイタリアのミラノで開催されたFENS FORUM OF NEUROSCIENCEに参加させていただきました。2年に一度の開催とあって、世界各地から非常に多くの研究者が参加しており、活発な議論とともに最先端の情報に触れることができ、今後の実験の方向性を考える上でとても参考になりました。著名な研究者の方々のシンポジウムも数多く開催されており、特にDr. Pico CaroniやDr. Yang Danなど第一線で活躍する研究者の発表は非常に質が高く、最新の手法を駆使した説得力のあるデータの数々を淡々と話す姿に圧倒されるばかりでした。今回はポスターでの発表だったのですが、発表スペースが非常に広く、本格的なカフェスペースも充実しており、気軽にディスカッションができる雰囲気が印象的でした。また、研究者同士の交流会やキャリア支援、特定の分野の研究会など学会後も様々な交流イベントが企画されており、研究者同士のつながりを広げる上で非常に有意義な時間を過ごすことができました。

今回、この学会に参加する理由の一つとして、ヨーロッパの神経科学分野の研究がどれ程の水準にあるのか、またどのような研究がトレンドなのか実際に自分の目で確かめてみたいと思ったことが挙げられます。近年、ヨーロッパの神経科学の分野ではその最先端であるアメリカに引けをとらない非常に優秀な研究者が数多く見受けられます。特に私が専門とする情動記憶の分野においても、継続して質の高い論文を発表しているヨーロッパの研究者が近年さらに増えてきているように思います。したがって将来の留学先を思案している自分にとって、この学会に参加することはその選択肢を増やすという意味でも良い経験になるのではないかと考えていました。また、自分と競合しているヨーロッパの研究者とも討論できる機会が得られるのではないかという淡い期待が少しだけありました。

私は今回‘Orexin System and Fear Memory Formation’というタイトルでポスター発表を行いました。オレキシンは1998年に同定された神経ペプチドであり、視床下部外側野のオレキシン産生神経は脳の幅広い領域に投射しています。オレキシンはその受容体である1受容体(OX1R) と2受容体 (OX2R) を介して、睡眠・覚醒の制御や自発行動、ストレス反応や報酬などの生理機能を持つことが明らかになっています。近年、私共の研究室ではこのオレキシンが恐怖記憶の形成、および想起の過程にも非常に重要な役割を果たすことを報告しました。また、OX1RとOX2Rはそれぞれ異なる条件下での恐怖記憶のメカニズムと関連していることも明らかにしており、この点については今回多くの研究者の方に興味を持って頂きました。また、実験に用いている抗体に関してオレキシンを研究しているオーストラリアの研究者の方から共同研究の依頼も受け、非常に収穫の多い発表となりました。オレキシンと恐怖記憶の関係については、先行研究などはほとんどなくOX1R、OX2Rがどのようなメカニズムでその機能に関わっているのか全く明らかになっていません。したがって、どのような作用機序を想定しているかについての質問がとても多く、その際なかなか彼らが納得するような説明ができない自分の勉強不足を痛感しました。また、情動記憶を専門にしている方にも多数質問をしていただき、どのように恐怖記憶におけるオレキシンの役割を詳細に解析していくかについて、非常に有効なアドバイスをいただきました。今後の研究の方向性について悩んでいた時期でもあったため、すぐにでも実践してみたいという意欲が沸々とわいてきました。このような深い議論ができるのもポスター発表の醍醐味であると思います。

国際学会は海外の研究者とのつながりを広げる絶好の機会ですが、意外にも自国の研究者とのつながりが広がる場でもあるなと感じました。日本からの参加者が少ないこともあり、同じ研究領域で日本人の方に会うと、必ずと言っていいほど自己紹介と研究の話になります。同じ研究領域なので当然共通の知り合いが何人かいたり、出身大学の話になったりと話は尽きません。また、その方を通して海外の研究室事情を聞いたり、同世代の日本の研究者を紹介していただいたりと非常に濃密な時間を過ごすことが出来ました。情報化社会になり、ある程度の情報はパソコン一台で得ることができるようにはなりましたが、情報の実用性や信頼性において人と人との情報交換に勝るものはないなと身にしみて実感しました。今後も国内外問わず学会や研究会には積極的に参加し、様々な人と関わる中で自分の研究をアピールしていきたいと思います。

最後になりますが、抄録やポスターの添削に最後まで付き合っていただき、このような発表の機会を快く承諾してくださった研究室の皆様に深く感謝いたします。